



Title	Causal Sequence and Clause Linkage : A Functional Study of Consequential Participle Clauses in English and French Texts
Author(s)	内田, 充美
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42253
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	うちだみつみ 内田 充美
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 1 5 7 1 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 12 年 9 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	Causal Sequence and Clause Linkage: A Functional Study of Consequential Participle Clauses in English and French Texts (因果的連鎖と節の接続—英語とフランス語のテキストにおける結果 分詞節についての機能的研究—)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 今 井 光 規 (副査) 教 授 春 木 仁 孝 教 授 沖 田 知 子

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、英語とフランス語の現在分詞構文の中で、分詞の意味上の主語が先行主節全体であると解釈される用法を主な考察対象とする。具体的には次のようなものである。

(1) With the exception of the Salang Highway, roads into the city are cut, resulting in shortages of bread, diesel fuel, sugar, kerosene and other basics... (TIME: 6 Feb. 1989)

(2) La terre a tremblé en Ombrie et la coupole de
the ground tremble PAST PERF. in Umbria and the dome of

Saint-François d'Assise s'est effondrée, mettant en péril
St. Francesca of + Assisi collapsed REFLEXIVE PAST PERF. putting in peril

les fresques de Giotto et Cimabue.
the frescoes of Giotto and Cimabue

(Paris Match Sep. 1997)

‘The earth quaked in Umbria and the dome of St. Francesca at Assisi collapsed, putting
the frescoes of Giotto and Cimabue in peril.’

いずれの例でも、下線を施した現在分詞から始まる分詞節の意味上の主語は、主節中で表された事態である。(1)では、街に入るための道路が1本を除いてすべて断たれた、という事態が物資の欠乏状態に至った主語であり、(2)では、大地震で大聖堂のドームが崩壊した、という事態が、フレスコ画を危機的な状態に陥らせたのである。

まず、(1)のような英語の現象に絞って観察と考察を進め、そこで得られた知見をもとに、(2)のようなフランス語の現象に目を向けて調査を行い、類似点と相違点について考察していく。

英語に見られる(1)の用法は、参考書などでは、「容認可能であるが好ましくないもの」としてとりあげられる

ことがある。記述文法においても、分詞の意味上の主語と主節の主語は一致するのが原則だが、その原則が緩和される例外的ケースのひとつとして記述されてきた (Quirk ら1985, ほか多数)。

しかし、実際の言語使用の集積であるコーパスから用例を収集し、個々の用例について、ジャンル特性とテキスト構成に留意した分析を行った結果からは、このタイプの分詞節が、通常のものとは別の独自の特徴を持っていることがわかった。まず第一の特徴として、ジャンル別の頻度差が挙げられる。(1) のような分詞節は論文などの学術ジャンルでの頻度が他のジャンルと比較して高い。小説などフィクションのジャンルでも、適切な文脈があれば実際に用いられているが、頻度は低い。

意味面では、ジャンル差に依らない一定の特徴が確認できた。それは、cause, give, make, confirm, lead to, result in など、必ず結果情報を導入する動詞が用いられているという点である。一方、しばしば「主節をうける分詞節」の書き換えとして示される<コンマ+which>形の接続では、be や have など、因果関係を表さない動詞も用いられている。これらの結果に基づいて、本論文では、このような分離現在分詞節を「結果分詞節」(consequential participle clause) と名づけ、通常の現在分詞節とは区別することを提案する。

結果分詞節を伴う構文は、情報構造の観点から見ても、興味深い特徴を持っている。コンマを隔てて主節に接続する分離現在分詞構文の情報構造についての先行研究としては Thompson (1983) があるが、Thompson は、分離現在分詞構文全般の情報構造について、分詞節は「背景」(background) をなし、他動性が低い、と述べている。これは例文 (1) のような結果分詞節にはあてはまらない。Thompson の記述は、分離現在分詞構文全般の情報構造についての観察としては十分とはいえない。そこで本論文では、結果分詞節と、それに関連の深い他の構文について情報構造の比較を行い、結果分詞節による現在分詞構文は、情報構造の面でも通常の分離現在分詞構文とは別のものであることを示した。

このように見かけ上は共通だが機能の異なる、結果分詞節と通常に分詞節による2種類の現在分詞構文について、より詳しい特徴づけを行うために、一般的な節の接続の観点からの分析を行った。その結果、通常に分詞節による節の接続は主に構造的要因によって成立しているのに対し、結果分詞節による接続を成立させているのは、因果関係という意味的要因であることが明らかになった。従来の記述は、主語の一致という構造的要因に着目して行われてきたために、結果分詞節の独自性が見のがされてきたのではないかと考えられる。主語の一致・不一致の規準で判断した場合に一般に分詞節と分類される例の中にも、結果分詞節としての解釈のほうが妥当と思われるものは多数存在しており、意味関係に支えられた結果分詞節による節の接続は、決して例外的・周辺の用法ではない。

次に、収集した実例を用いて、どのような種類の因果関係が結果分詞節を用いて表されているかを調査し、結果分詞節の成立状況をさらに詳しく分析した。分析にあたって、本論文では、動詞意味論においてひろく採り入れられている語彙分解の方法を採用した。具体的には、主に Dowty (1979) に基づいて、原因事態と結果状態が関係概念 CAUSE で結ばれた、因果関係の意味構造を想定した。新聞、雑誌、商品カタログなどから引用したさまざまな結果分詞節の実例に見られる特徴を分析し、Dowty (1991) の「プロト役割仮説」(Proto-Role Hypothesis) に基づいて整理した結果、結果分詞節による節の接続は、動作主のない、事態間の因果的連鎖を表す表現手段であることが明らかになった。

続いて、以上の、英語の結果分詞節による節の接続についての調査と分析を踏まえて、フランス語に見られる同様の現象について調査を行った。フランス語の結果分詞節については、(2) のように、用例は現実に見られるが、これまであまり注目されていない。実際の使用傾向を知るために、両言語の資料が対照可能な形で収められたパラレルコーパスを用いた比較を行った。主な結果は次の2点である。

- (3) a. 分詞の意味上の主語が、特定の名詞(句)であるとは決められず、先行主節でしかありえないような現在分詞接続には、英語の場合と同様に、因果関係が不可欠である
- b. フランス語での頻度は英語の場合より低い

比較的頻度が低いことの原因のひとつとして、いわゆる使役動詞の語彙的性質の違いが考えられる。動詞の語彙的意味の中に、使役関係と結果状態が含まれた「壊す」「溶かす」といった意味を持つ動詞をここで語彙的使役というが、一般にフランス語の語彙的使役が使用できる場合は英語の語彙的使役の場合より限定されているようである。Dowty のプロト役割仮説に沿って言うならば、フランス語の語彙的使役は、英語の語彙的使役と比較して、その主

語項に、より高い動作主性を持つ実体を必要とする傾向が見られるのである。英語での調査と分析から、結果分詞節は動作主のない因果的連鎖を表す表現形式であることを上で示したが、そのような意味的性質をもつ事態間因果連鎖はフランス語の語彙使役とは本質的に相容れないのだと考えられる。

以上のように、本論文では、規範的立場からは「逸脱」の一種とみなされ、これまで言語学的分析の対象とされることがほとんどなかった現在分詞節の用法をとり上げた。従来の記述では、構造的特徴に主な注意が向けられていたために十分な取り扱いがされていなかったものだが、本論文では、意味的特徴に主眼を置くことによって、その本質的な特徴を明らかにすることができた。このような成果は、さまざまな実例にあたり、個々の実例の文脈（狭義の文脈であるテキスト構造、広義の文脈であるジャンル特性）を考慮に入れた幅広い分析を行うことによって可能になったものである。その結果、一見例外的と見えた現象が、実は人間の認知の流れに沿った節の接続方法となっていることと、普遍的な関係概念のひとつである事態間の因果関係を表現し解釈する言語使用者の目的に動機づけられて、この接続方法が用いられていることを明らかにすることができた。

論文審査の結果の要旨

英語の伝統文法では、分詞構文における分詞の意味上の主語が明示される特殊な分詞構文は別として、分詞の意味上の主語と主節の主語を一致させることが原則とされ、それが守られていない分詞構文は好ましくないものとされてきた。本論文は、主節に続く現在分詞節がコンマによって主節と区切られ、主節の表す内容が分詞の意味上の主語と解されるタイプの分詞構文に焦点を当てる。本論文はそのような構文に見られる現在分詞節を「結果分詞節」と名付けている。この種の分詞構文は、今日の主要な記述文法書においても、科学論文などの英語に見受けられるもので、前述の一致の原則が緩和される例外的な構文とみなされている。

本論文では、既存のコーパスおよび化学論文の英語を独自に編纂したコーパスから用例を収集し、テキストの特性に注意を払いながら使用頻度を調べるとともに、類似した機能を果たす関係代名詞節と通常分詞構文との多面的な比較を通して、分詞構文の内部および更に広い文脈における情報構造を分析し、関連する分野の諸説を批判的に援用しながら、「結果分詞節」を伴う分詞構文が成り立つ条件を理論化している。フランス語における同様の構文についても、英語の場合と同様の方法で調査と分析を行い、英語とフランス語における分詞構文の共通点と相違点を理論的に説明している。

本論文が焦点を当てたタイプの分詞構文は、使用されるジャンルや頻度の点で、あるいは分詞の意味上の主語の在り方の点で、例外的なものに見えとしても、事象の因果関係を捉える人間の認知の流れを反映した自然な節の連結方法であり、分詞構文の中に一つのタイプとして本来独自の位置を占めるべき構文であるとする本論文の結論は、使用例の分析と緻密な理論化によって裏付けられ説得力をもつものである。

なお、本論文では用例の収集に関してコーパス言語学的技術の使用に創意が見られること、ならびに論述の理論的展開が全体として明晰であることを付言しておく。

以上により、本論文は博士（言語文化学）論文として十分に価値あるものと判断する。